太棹

加茂虎之助
しげき画

第九拾四號

東京 太棹社 發行

胃腸に ミラカチ

東京市日本橋區通二ノ五
新潮製藥株式會社
電話日本橋三八一二番
振替東京七〇一〇八番

關西料理

すつぽん椀なら江戸前蒲燒なら
御宴會は大勉強すべて安値に

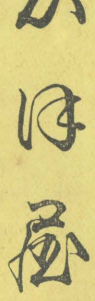
円六

九段下 俎橋
電話九段四〇〇六番

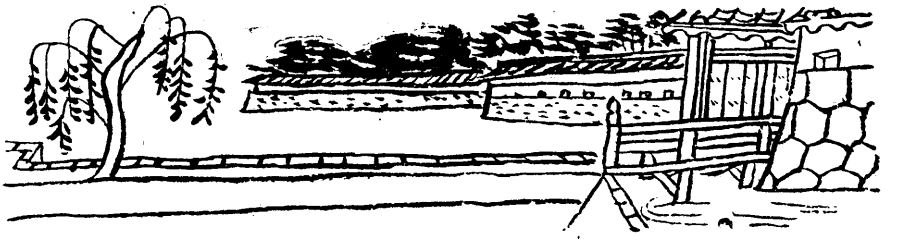
女中は皆藝人揃ひ・太棹の彈き手も揃へて皆樣をお待ち致して居ります。
——円六獨特のサービス——

風流・金ぷら・茶漬

【美地句】



新橋 二ノ八
電銀 二〇八



太　棹　第九拾四號目次

義太夫雜話……齋藤拳三…(二)
ラヂオ淨曲漫許……金王丸…(四)
文樂樂屋圖譜……宮尾しげを…(七)
湯屋淨瑠璃……鶴澤蟻鳳…(八)
淨瑠璃故事拾錄……薊露生…(一〇)
素義風流線……芳河士…(一一)
義太夫と時局……北仙…(一三)
音曲昔噺素養……鐵老生…(一四)
猥褻の文句に就て……咲啼女史…(一六)
會報……(一七)
太棹社彙報……(一八)
各席語り物帳より……(二六)
當座帳……(二七)
編輯後記……芳河士記…(二八)
表紙・カット……宮尾しげを……

義太夫雜話

齋藤拳三

金造追憶補遺

――團璃師の說――

前號の故野澤金造追憶の內豐澤富助へ入門の動機に關しては、故富助師唯一の直弟子として斯道の造詣深い團璃師の別の一說がある。私は自分の書いた說を訂正はしないが、相手が頭のいゝ團璃師だけに、十分再錄すべき價値あるものと思ふ。以下は師の直話である。

『惜しい男を殺しました、私は唯一の藝談の相手を失つて此の上も無い寂しさです、あれは隱れたる名人の一人です。もう少し話す機會さへあれば宗敎の事が解りかけたのです。(團璃師が熱心な佛敎信者に對して金造は無信心な男だつた)

あれが彈いた三人の太夫の內で、一番苦勞をしたのは薩摩太夫でせう、殺された古靱の弟子で、鳴戶、朝顏、紙治、野崎、新口などは何とも云へないいゝ味がありました。

岡太夫は三味線に注文の無い人でしたが、薩摩太夫は仲々やかまし屋でしたからね。然し二人とも根からの玄人ですから何としても樂な所はあります。其處へ行くと柳適太夫は素人出の化物ですから三味線によつては全然語れません。

音もよし、藝も達者と云ふので金造を引き拔いて使つたのですが、團平系の藝で無いから丸で氣に入りません、其處で柳適が富助師匠の所へ連れていつたのです、半歲ばかりの間は金造は丸で三味線が彈けなくなりました、壺が全然違ふからです、怖いものですね。』

團璃師は薩摩太夫が好きらしい。然し金造は薩摩は質店を、柳適は關取二代鏡を賞めた位で、餘り此の二人を買つてゐなかつた。常に岡太夫を激賞してゐた、金造の語り口は富助八分に、二分位は岡太夫の語り口が加味されてゐた樣に私は考へる。

素義即成敎授

南多摩郡加住村にSと云ふ親子で義太夫を語る素人があつた、息子の方が私の知人だつた、明治の中期、田舍の寒村では若い青年がモートルや遊里に通ふ事を防止する爲に、村長が義太夫の師匠を手錢(ポケットマネー)で雇つて青年を集めて稽古をさせた今から思ふと全く隔世の感がある。此れは今で云へば一種の青年團訓練の一つで、冬期に入ると消防隊を兼任してゐる村の青年を一箇所に集めて置くのに役立

つたのである。だから當時の青年は三勝のサワリ位は、今の軍歌や草津節程度に常識藝となつてゐた。

私の友人Sは一寸奇人であつたが、酒席で語る義太夫は必ず聽き覺えのサワリで、本式に稽古をしたものは決して酒席では口にしなかつた、なか〳〵藝を大切にして大自慢だつた。

鶴澤龜雀と云ふ名も無き盲人の三味線ひきが彼の師匠だつた、この稽古が風變りだつた。彼は甲には合邦は玉手御前さへうまければ此の淨瑠璃は結構だ、後はサラリと讀んでしまへと敎へた。乙には丸で反對に合邦がうまく語れゝば玉手などはどうでもいゝと說いた。自然甲には玉手の言葉にやかましい駄目を出した。乙には合邦の言葉をあきる程繰り返した。

友人Sはよく本藏下屋敷を語つたが、一段としては極めて平凡だが、本藏だけは仲々よかつた、一寸今の人の誰もが演らない妙所があつた。昔の太夫は一段としては可成に缺點もあるが、一個所だけ飛拔けてうまい個所が必ずあつた、一段全部が平均してうまくなつたのは三世越路あたりからではなからうか。

相生、呂、あたりの若い太夫は早く何か一つの特長を出さなくてはいけない。

古風なうまさと云へば、私の知る限り今では津太夫である。一段とすると可成缺點は目立つ、然し、沼津なら平作、陣屋なら彌駄六、すし屋なら彌左衛門が飛拔けてうまい。

故人柳適太夫も關取二代鏡が飛び拔けてうまかつたらしい。

昔は餘りに猛烈な稽古をしたので、其の人の個性だけが色濃く浮び出て此んな結果を生んだのでは無からうか。

盲目の龜雀は旦那のお稽古に此れを善用、(或は惡用)したのではなからうか。

無論これは試驗勉强のカンニングである、私は若い太夫に決して此れを勸めるものではない。が今の義太夫界は三味線過剩、太夫不足の非常時である、窮餘の一策に一寸頭に浮んだまでゞある。

義太夫評の至難

劇評は可成ごまかしが出來る、少し筆の立つ人が名文で書くと、出鱈目でも相當面白く讀める、其處へ行くと義太夫の評は難物だ、三味線と來ては尙至難だ。

先日、福岡市で發行される大日本淨瑠璃雜誌に或る素義の『阿漕』批評が載つてゐた、評者は「立退し古跡は都——鄙の住居に春姫は」まで時代に語り「名をばお春と改めて」から世話に語るべきだと書いてある。私は此の評者とは意見が違ふ。「鄙の住居に」から世話で語るべきかと思ふ。此れは英文法のモデフアイヤーと云ふ問題が解決すると思ふ。大方識者の敎へを乞ふ。

ラヂオ演劇評

東京長老

〔一月二十七日〕

伊賀越道中双六

＝政右衛門屋敷＝

竹本津賀太夫
紘紋左衛門

朝太夫逝いて、東京では、津賀さんは最長老の太夫である。東京へ來て五十年になるといふので、芝の飛行館で、お祝ひをやつたのも何年か前、そして今度、因會の會長をやめて、現役を引退する、その披露が近く、歌舞伎座の大殿堂で、いとも盛大に催されるといふ。今後は、米翁の名によるお師匠さんで餘生を、文字通り八十八までも九十までも送られる事であらう。ラヂオで聽いて、拙者が憶えてゐるのは何年か前、岡鬼先生の解説で、寺小屋を半分ほど、愛宕山から電波にのせた事があつた。など考へながらスキッチを入れる。心がけある侍は……の出、ア、津賀さんだ、と先づ膝を進めた前書が長くなつたから、手ツ取り早く片づけるが『又た堅造がわせられた、誰ぞ羽織持て……など、品のある好い呼吸。政右衛門は始終上乘。宇佐美五右衛門がわれらの勝手をいへば、まだ〳〵、我無シャラ氣が不足であつた。今一層強くガツチリ仕て貰ひたかつた。お谷はちよつとだけゆゑ評もない。當夜の紘左衛門さん、いつもよりは更らによく鳴つて結構な紘であつた。と賞める。

大阪女義

〔二月一日〕

傾城阿波の鳴門

＝巡禮歌の段＝

豊竹昇之助
紘豊澤力松

一時東京で、姉さんの昇菊とコンビで若いドウスル連の血を沸かした昇之助さん。今でも時々マイクの前に現はれるがもう斯ういふ現役だか豫備だか判らぬタレと來ると、進歩などいふもの微塵も聽き出されず、唯だもう、昔ながらの……ハレヤレ變哲もない事と、又してもガツカリする外はない。「鳴門」など格好な語り物なのだらう。跡うちながめ女房が……』から何でも二つ目の御詠歌をヌイたやうに思つたが、『さうぢや〳〵と子に迷ふ、道は親子の別れ道、跡を……』までそれでも、男性の三味線のシツカリした音〆に、唯だ、むかしながらに唄つてる高座をなつかしんで聽き入るだけのことあア濟んだ……と喫ひさしの煙草を灰皿へ突ッ込んで、二階の書齋へ上つたやうな譯。

大阪女義

〔二月七日〕

義經千本櫻

＝すしやの段＝

竹本東廣
紘豊澤仙平

これは又た大阪女義界の大元老である殊に、先づ我等の氣に入つたのは、彈語りを廢して、仙平といふ達者ものを絃に賴んでの熱演である。すしやを、お里のサハリから、不思議と申しては失禮かも知れぬが、お里に充分の色氣のあるのは熱の力である。豪いッ！　やがて、梶原の出、これなどは正に女とは思へぬ大きさ、仙平さんの撥音亦た頗る雄壯、感服ものである。例の時間の都合とあつて、大分、ところ〴〵ウロぬいて、權太の殺しから段切まで、文字通り息もつかせず、文句を言へは、手負になつた權太に感違ひがある。ツマリ强過ぎるのであつた。彌左衞門や母親の結構な事申すまでも無い。何といふても大したもの、久しい御ひねきの慾目ばかりではない。

東京女義　〔二月十九日〕

伽羅先代萩　＝政岡忠義の段＝

竹本素女

東廣の後に、素女があらはれる。東西女義の大御所競演の態である。但しこれはAKの第二放送新設演藝であつた。まくらを半枚ほどで、飯焚を遁げ、直ぐ榮御前の御入りである。これは又た頑强に、彈語りを堅持してゐるが、出のオクリなど取りわけて結構なものと感心する或る人は駒が少々輕い恨みがあると評してゐた。とにかく流石である。强いて白壁の微瑕を求むれば、榮御前の貫目が少し輕く、政岡も幾分その嫌ひはあるが、八汐其他が奥へ去つてから、二人の對談、取りかへ兒の一件で『ヒエー、何と仰ツしやる……』などは、頗る結構であつた榮が歸つてからの政岡頗る上乘で、泣きも眞に迫るものがあつた。我等は近頃の御殿であり、素女さんの近頃の出來だッたとおもつた。

東京女義　〔三月二日〕

菅原傳授手習鑑　＝松王屋敷の段＝

竹本小土佐
絃　豊澤美佐尾

昨年、文樂を引退した土佐太夫の先代土佐太夫から、土佐の名跡を貰つたといふ小土佐さん、甲羅が生えて、猫ならば大抵化ける時分（失言）その小土佐さんが、今に、時折、マイクを通して、我等に昔年のアノ懷かしいお上るりを聽かして下さるのである。好いの惡いのといふさへ失禮であるかも知れない。が、とにもかくにも謹聽した處によると、上使、春藤玄蕃の出からであつて、その玄蕃がいかにも弱々しい、松王も今少し確かりして欲しいとおもつたが、千代のくどきは、さすがに相應に聽いたし、尙ほ、あの年で、まだ〳〵アノ上の聲がアレだけ出るといふのには感心させられた。あれだけの上の聲が出るといふ事になれば、まだ中々廢められない譯であるナと思つた。美佐尾さんの絃、毎度御苦勞樣。

文樂中堅　〔三月七日〕

妹脊山婦女庭訓　＝妹山背山の段＝

脊山の方

大判事　竹本相生太夫
絃　鶴澤道八
久我之助　竹本源太夫
絃　野澤吉左
妹山の方
定高　豊竹つばめ太夫
絃　竹澤團二郎
琴　野澤喜代之助
雛鳥　竹本伊達太夫
腰元　竹本さの太夫
絃　鶴澤重造

文樂座三月興行の大阪新町演舞場からの中繼放送である。新義座の盟主としてわれ等が大のひゐきであつた豊竹つばめ太夫が、ソコにはどんな事情があつたか忽然として、元の文樂座員となりすまし五月には織太夫といふ名を襲ぐ前に、この定高の大役を勤めてゐるのである。絃の團二郎もやがて、團六にならうといふ人、老大家道八を向うに廻して、コヽ、曠がましい懸命の舞臺である。全段克明に語れば二時間に渉らうといふ艶麗、雄大の左右兩床、それを五十分だけの中繼である。雛鳥の出あたりから、中程の「逢はで別るゝ名殘の涙、一つに落る三つ瀬川……」と、雛鳥自害の決心あたりまでの放送時間五十分間とある。義太夫黨には稍々物足らぬ感じがする。一口評で御免を蒙るが、先づ相生太夫の大判事は相當貫目と落付きは聽かせたが、更らにドツシリとせねば其人にならず、どうやら敵役になつたのは殘念であつた。源太夫の久我之助は、あはれや調子も外れたり相當の品位はあつたが、力が不足であり又た色氣など皆無といふ、所謂荷の勝つた代物である。つばめの定高、先づ嬉しかつたのは聲にしまりのある所であり、此の戯曲の定高として充分に品位を聽かせたのは、何といふても傑出した出來である。伊達太夫の雛鳥も、勿論役所ではあり、或る程度まで無難と思つたのを、案外にも頗る付きの上出來であり、御殿の政岡などゝ違つて、娘形とあれば、色氣も充分、品位もあり、といふ佳品であつた。要するに、近來の大曲で、おもしろい事であつた。

文樂中堅　〔三月十四日〕

三十三間堂棟由來

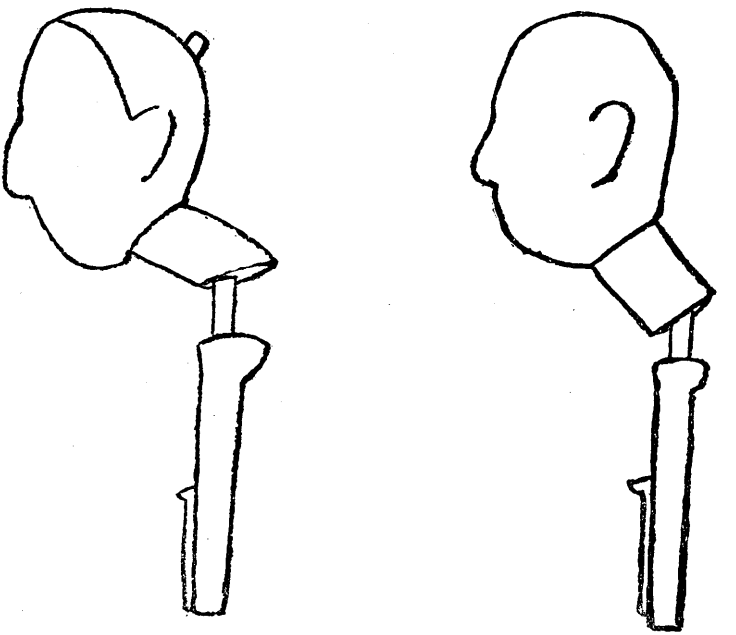
＝平太郎住家の段＝

豊竹呂太夫
絃　鶴澤叶

直截に言へば、此の太夫の上るりは我等大好きなのである。そのつもりで聽いたのであるが、結局呂太夫としては損な演し物であつたから、やゝ期待をうら切られた形である。まくらをやつて、中の泥棒へ飛んで、キヤリで納める譯にはゆかなかつたものか、損といふのは、此の人の聲柄の關係からである。語り物は大切なものである。先代南部太夫が東京での終曲と覺えてゐるが、新富座の舞臺で我等を呻らせたのを思ひ出させた。それ以來、柳は誰れのを聽いても、感服しない我れ等ではある。しかし以上は、ひゐきの我れ等大體に於てのはなしであつて彼の『いさぎよい名を上げてたも……や……から、草木成佛……のくだりなど頗る結構な事であつた。老母のやゝ若過ぎたのを難とする。叶師の絃、相變らず結構であつたが、枕の邊にカケ聲がやゝうるさい氣がしたのは、いつもあアであるのかとおもつた。

文樂樂屋圖譜（廿七）

宮尾しげを



立役のと女形の人形頭の違ひ

立役の頭（かしら）は首の線と頭とが直角で首の中部に固着してゐます。女形になると、首が前方に出ます、したがつて首の中軸が前の方へ付いてます胴串（人形つかひが持つ棒）は、人形遣ひの好みがありまして長短があります。今の文五郎さんは昔からあるより一寸位短かくなつてるそうです。この角度の違ひで衣裳をつけた人形が舞臺で生きるのです。これが反對でしたら、人形はぶちこわしになつてしまひます。

前號廿七とせしは廿六の誤り。（記者）

湯屋淨璃瑠

鶴澤蟻鳳

私が現在の處へ居を移してから、もう五年になる、その間、最も私を悦ばして呉れたのは、夜の湯であつた。

私は若い頃から朝湯が好きで、めつたに夜の湯へ行つた事はなかつた。

或る夜、餘り寒いので、夜遲く湯屋の暖簾を潛つた、途端に『アツ！』と私はそこに立ち竦んだ。

それは、濛々たる湯氣の中に『今頃は、半七さん……』と素晴しいメロデーがながれてゐるからである、『これは珍らしい！』と私は心で叫びながら聲の主をもとめた。

と、湯槽の中に、年の頃六十歳餘りの、商家の主人と思はれる、品のよい老人が『思へば〳〵この園が、チン〳〵〳〵』と口三味線まで入れて、頭を振り立て唸つてゐる。

最近殆んど影を潛めてしまつた湯屋淨るりに、偶然出會つた私は、嬉しいやうな?、くすぐつたいやうな?、一と昔も前に別れた女に、ひよいと會つた時のやうな氣持がして、思はず苦笑せざるを得なかつた。

湯屋淨るりの事であるから、定式を逸した吹出したくなるやうな箇所もないではないがなか〳〵の達者で、理窟なしに面白い事無類である。

つい聞きほれて、思はず長湯をしてしまつたが、近頃にない愉快な氣分に滿たされて、晩酌の德利も常より輕るく、おきまりの外に一本を追加して、家内のガマ口の豫算を狂せてしまつた。

私はその老人に引付られてか、次の夜も、時間を計つて湯へ行つた。そして、寺子屋を聞いた……面白い……また次の夜も……先代萩……實に愉快だ……たまらなく嬉しい……

私はこの老人のために、永年の朝湯黨を、夜のしまひ湯黨に轉向させられてしまつた。

この老人の特色とも云ふのは「サワリ」だけをやるとか、いゝ處だけをやると云ふのではなく、一晩一段主義で『東西〳〵、今晩御開に入まするは、三十三間堂棟の由來……』と、自身に口上をつけ『デン〳〵〳〵……』と口三味線入で、ヲクリから始めるのである。

酒屋、寺子屋、先代萩、壺坂、儀作、蝶八玉三、其外十數段を聞いた。

そして面白いのは、この老人にファンがある事である。染物屋の隱居、荒物屋の親仁などがそれで『お爺さん、今晩は何々を聞かして呉れ……』と注文して、眞面目に樂しそうに聞くのである。

そして一段終ると、老人の自慢ばなしになる。私が思はず吹出したのは、老人の氣焰の中に『私が若い頃は、いゝ聲が出たものだ、朝太夫さんが、君に前を語られると、僕がやりにくくて困ると、よく云つたものだ……』と。

その老人が、最近ばつたり夜の湯へ來なくなつた。病らつてでもゐるのではないかと、氣にかゝつてならなかつたが、何時とはなしに忘れてしまつた。

先月の二十日の事である、いつもの湯屋が定休日なので、隣町の湯屋へ出かけた。

そして私は思はず「アッ！」と聲を發して立ち竦んだ。『コレ見給へ光秀殿……」と懷しいアノ聲がするではないか。

『オヤ、アノお爺さん、こつちの湯へ來てゐたのか！』と思ひながら、その傍らをひよいと見て、また〳〵驚かされた。

例の染物屋の隱居、荒物屋の親仁も來てゐて、神妙に聞いてゐるからである。『ハテ妙だ？』と私は咄差の間、茫然とせざるを得なかつた。

その中に染物屋の隱居が私を見付て『貴下が義太夫の先生である事を知ると、アノ爺さんは、こつちの湯へ來るやうになつた、それで私達も、近所の湯を通り越して、こんな遠くまで來なければならぬので困つてゐる』と愚痴られた。

私は寢耳に水と云うか、鳩が豆鐵砲を喰つた時のやうな周章かたで『それは〳〵貴下方の樂しみの邪魔をして申譯がない、明日から私は夜の湯へは這入らぬ事にするから、貴下方は、いつもの湯へ來て、ゆつくり樂しんで下さい』と詫びて、そこ〳〵にして逃げ歸つた。

で、また元の朝湯黨に戻らざるを得なくなつたが、何だか物足りない氣がしてならない。

併し朝の湯漕で手足を延ばし、靜かに瞼をとぢると、夜の湯であの老人が、頭を振り立て特意になつて、淨るりを語り三昧境に入つてゐる傍らに、湯桁に脊をもたせ、兩足を投げ出し、世の中のあらゆるものを忘れたかのやうに、樂しそうに聞入つてゐる、例の隱居居や親仁の姿を想像すると、私は肚の底から込上げてくる、爽快な氣分に支配され、大口開いて叫びたくなる……『老人達よ、いつまでも、健在であれ……』と。

民事
刑事
商事
特許事件
迅速懇切
に取扱ふ

辯護士
法學士
飛石久太郎
俳號 かなめ
東京市牛込區東五軒町五四
市電東五軒町停留場際
電話牛込(34)五七四七番

情歌（淨瑠璃文句入）

▼

歸るその時や人目の手前（太十）『何れもさらばと言ひ捨てゝ』後で末練の立ちばなし

▼

逢ふたその夜は下紐といて（辨上）『攢れつ揉つれつ相生の』松にからみし蔦かつら

▼

兼て覺悟はしはしながらも（沼津）『思ひつきしが身の因果』忘れられぬも戀の意地

▼

時節を待つのは知ては居れど（日吉）『とし月隔つそのうちに』忘りやせぬかと又苦勞

▼

人の意見はいとひはせれど（阿古屋）『情けと義理に挫かれて』破らざなるまいこの操

浄瑠璃故事拾錄

蘭露生

思へば蘆生の夢（阿漕）

平治佳家に「思へば蘆生の夢」といふ事あり『唐の開元七年邯鄲の舍に於て、蘆生が呂翁に窮苦を告ぐ、翁仙術あり、授くるに囊中の枕を以てす、蘆生之を枕して眠る夢中崔氏の女を娶り渭南尉觀察御史等の榮位を得て年八十にして死す、と覺むれば翁前の如く黄粱を炊ぐ、其間數分時』と「漢語大和故事」に見ゆ、今迄の行ひは夢の如しと平治が歎く譬ならん。

盲龜の浮木（朝顔）

宿屋で「盲龜の浮木」といふ事がある。阿含經に『佛告二諸比丘尼一譬如三大海中有二一盲龜一壽無量却百年一過出レ頭有二浮木一正有二一孔一漂二流海浪一隨レ流東西盲龜萬年一出得レ遇二此孔一』云々とあり、事成らずして斷念せし時、思はざる助けを得たといふ事。

領布麾嶺（同）

太井川に「石になつたる松浦潟ひれふる山の悲しみ」の文句がある。欽明帝の御宇大將軍大伴の狹手彦、命を蒙り高麗を伐たんと舟を艤して蒼海に赴く、松浦佐用姫は切に別れを哀み高山の嶺（鏡山）に登り號泣し、領布（天武紀に肩中を比例といふ）を振りて遙かに離去の舟を麾れく、此山を號けて領布麾嶺と云ふなりと。萬葉に「とほつひと、まつらさよひめ、つまこひに、ひれふりしより、をへるやまのな」又他にも「よろづよに、かたりつげとし、このたけに、ひれふりけらし、まつらさよひめ」などあり。鏡山は肥前にて松浦潟と相對し旁々以て朝顔が別れを哀しむの比喩となせしは周到なれど、石になりしてふ據り處を見出さず、東海道の「小夜の中山夜泣石」などより、佐用と小夜名の似通へるを以てこじつけたるに非ざるか。

久米仙の通（忠七）

忠臣藏七つ目由良之助の詞に「久米仙か通」と云ふ事あり。元享釋書に『久米仙は和州郡山の人なり、入二深山一學二仙法一食二松葉一服二薜茗一一旦騰レ空過二故里一會婦人以レ足踏二洗衣一其脛甚白、忽生二染心一』即ち時に墮落すと通を失ふといふ故事なり。

眉間尺（安達二）

安達原二に「一念頭に上りて本意を遂げし眉間尺口に劍を含まずとも一心のれ又」といふ事あり。昔唐士に眉間尺といふ豪の者あり、國王に怨みあり、王其仇を爲さん其仇を怖れ捕へて殺さしむ、劍の鋒を嚙み口に含んで死す、尚ほ活るが如し、王懼れて鼎中に投じ之を煮る。王至りて見れば其劍を吐いて王の首を斬る、二首鼎中に爭ふ、從者義に自ら刎れて鼎中に墜し、三首鼎中に爭ふといふ。鞆絞の由來これなり。

海の何段といふ事

盛衰記の宇治川で「梶原は佐々木に一段許り進みたる」又逆櫓に「三段ばかり云々」といふ事あり。この一段とは六間の事なり『和爾雅』に見ゆ。

素義風流線

……芳河士……

猪谷銀水氏

銀水氏は人も知る濱町河岸の割烹『銀水』の主人公である。義太夫界では「銀水」の名は古いもので、割烹銀水の人に知られてゐると同樣、氏は東都素義界の古强者である。

一昨年秋、東西素義競演大會で可遊氏が病氣の爲めの缺演に代つて出演されたが、氏に言はすると稽古も何もせずこの出演は犧牲になつたのだと、あの大競演會、東京方の缺演の穴に大なる責任を負ふての急出演は、全く氏の豪膽さがうかゞはれる。

其後氏は久しく休演してゐた矢先、今度事變でいよ〳〵當分語らぬ事に決意されたさうだが、又何時語り出すか知れないので、引退めいた聲明書は出さず、殊に趣意の通つた會なら今でも語り、どこへでも顏を出すとの事である。兎に角永い休演、義太夫會も氏の顏の見えないのは淋しいことである。

氏の釣と競馬は有名なものであるが外に又奥床しい趣味が一つある、それは鶯である。

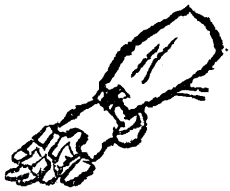
僕も鶯が好きで、一時は晩秋になると護國寺の墓地で呼鳥で藪を捕つて、その餌づけるのが又面白く、七八羽も餌づけては友人にやつたものであるがさて良鳥を聞きつけると藪では我慢が出來なくなる。

氏の飼育さるゝ鶯は文字口の名鳥で氏は年々雛をつけてその出來不出來を樂しんでゐられる。

氏の鶯談に依ると、近頃は鳥をこさへるさうで、それは一つの金庫のやうな中へ、飼育する雛の籠をいくつも入れて（この金庫の中には電氣をつけてをく）例へば、上ゲのいゝ鳥の鳴く時にはスイッチでその上ゲだけが金庫の中の鳥に聞こへ、下ゲの惡い鳥の鳴く時は又スイッチで此惡い下ゲの聞えぬやうにして、下ゲのいゝ鳥の鳴く時に聞えるやうにするといふ風に、上中下三聲ともいゝものばかりを仕込むのださうで、これは商賣人の事だが、氏は年中餌の分量を同じにして、光線も變化なく飼育してゐられる。一度、隣家で飼つてゐる藪鶯のホケキャウが自家の子飼の鳥に交つて閉口したといふ話がある。

今年もさだめて名鳥が出來る事であらう。

素義風流線既載の諸氏芳名＝玉井松樂氏・松岡茂里雄氏・近江清華氏・小林和舟氏・山田壽瓢氏・安藤どくろ氏・寶藏寺天昇氏・高橋可遊氏・白井清華氏・湯原清司氏・高瀨操氏・歸山花世歸氏



義太夫と時局

北仙

（其の一）

クリストも釋迦も孔子も吾人の先祖ではない。然るに日本累代の聖天子樣は御先祖であり神々で在らせらる。吾々の家族は此の國體と流れを等しくして、二千五百年の傳統的顯れが發露する時萬歳の邁進に連れて、喜しいでも無く、去りとて悲しくもなく、何物か胸に込み上げて來て熱き涙無しには居られぬ。詮議立するまでもなく擧國一致、奉公誠私、敬虔の涙であるのである。

父を亡くして四十年、母を失つて二十五年歳々の法會に三人の兄弟相集まり、内一人の妹も缺けての思ひ出は、歳毎に亡き父母の神々しい御姿が深かくなる許かり、一點だにも缺點處か、唯々難有さが增す許かり、神樣で無くて何んであらふ。佛樣で無くて何んであらふ。石に蒲團も着せられずで、せめては已れの子孫に報恩の一端にても盡さねばならぬと思ふて、日も亦た足らず。之れを愛とか云はん恩とか謂はん、道理も說明の何物も無く一念可愛と謂へ盡くす外は無い。

之れは私のみで無く邦人何れも同じである家長を讓つて孫か出來、家計が許せば一日も早く隱居となつて、祖先の神樣と二代の家長の中間に介在して、半ば神の位に坐わる、謂はば現世の神としての任を荷ふの重大なる責任がある。隱居とは樂をしたいからの役では無い、之れが家族制の貴い故であり、かくの如く代々の家長家族が犧牲忍耐至愛の傳統を成して家族制が完くせらるゝのである。

恐れ多くも、皇室至尊に思いを同じゆすればこそ、萬歳の一聲、一死奉公の顯はれとなる、之の世界比ぐい無き國體。之の皇道の爲めにはキリスト、釋迦も孔子をも總てを同化すべきである。

明治は帝國の維新で日本を皇道に立て直したものであり、其の德を以て昭和の御世に及ぼして、世界の維新に大日本帝國に使命を授けられた、恐らく皇祖皇宗は紀元二千六百年の今日、創世よりの豫言で在つたに違ひ無いとさへ拜察せざるを得ない、敵ながら祖國の爲めに戈を取る南無と誦へて切り捨てにけりと。一軍人は發しては萬朶の櫻の情、凍つては百錬の劔と成つて、武士の鑑みとなつて居るでは無いか、いや夫れ許りでは無い昭和の御代尙ほ武士道は棄たれず、忠臣藏の義士は眞砂の多きが如く、楠公、乃木將軍も簇々として顯はれて居り、悼わしくも亦た皇國の爲めに力强さを感ずる次第である。

（其の二）

去月上京の際淸正二條の城を吉右衞門丈に依つて觀せて貰つた、勢揃の陣大鼓法螺の貝等志氣振へ立つ事、喇叭の聲と變りも無い。淸正出發に際し、部將に軍略を授ける、途中の變に具ふべき差圖も今日の將軍の命令と何んの變りも無い、無論物の具を纏へながら仕

草も劇としては成効であり、義勇奉公、軍國時局に偉大なる力を與へられた事も勿論である。老獪家康の面前に於て、敵方の智謀佐渡の守をトッチめた膽勇と智略をも備へたる外交手腕も充分に認められた。最後の大阪城を拂曉に認めたる時舷頭に跪座して幼君秀頼公を迎へての述懐の肺腑に徹する物があつて涙を絞らぬ者は無かつた。義士傳にしても、寺小屋にしても、太平の御時世よりも、今日の國民總動員の場合一層意義あらずや。何にも最近揣悪無類なる新作の義太夫を捻出して時局に投せ様とする要は無い、新左門師が連引きを用ゐて進軍喇叭を三味線の音色にて巧みに聽せた外、笑ふべき愚にも附かぬ義太夫の顔汚しとこそ思ふべけれ。

（其の三）

家族制を基礎とする日本には。世繼即ち嫡男を得る爲めに、婦は子なければ去ると云ふ悲哀があろ。然し『ホーム』とは歐洲列國の夫婦本位に用ゐられたるものを無理に家庭と譯したるものにて家庭と家族とは大なる隔ありて其の家即ち祖先傳來の家系の爲めには夫婦愛をさへ犧牲にする烈婦も、日本なればこそ存在することもある特種の國柄にして、妾を蓄ふることも、特異の國風にして、余は之を是認する者には非らざれども、女は家系存續に對して犧牲を忍ぶと云ふ一面の美點を參考として考へざるを得ざるを如何せん。然し此の特異なる美點に隠れ又は悪用したる不心得者のありし事も事實にして、其の影響として吉原、其他遊女の起りしも蓋し故あり。然し現今の劣悪なるカフイ式の無軌道のものにはなし、意氣張、義理人情、心中立等の數々は之れ又た各國に例無し、必ずしも日本の情愛低級なりなど一笑に葬り去るべきに非らず。

結論

近來思を爰に致して初めて艷容女舞衣三勝半七の傑作を讀む時、語物を聽く時、女性の犧牲的心情の神々しさを、お園なる女性に於て認めざるを得ず。一々書き立つる迄も無けれども

子迄成したる三勝どの篤くにも呼入さしやんしたら半七さんの身持も直り云々
去年の秋のわづらいに一層死んで了ふたらこうしたなげきもあるまへのも云々

其の眞情には自から頭の下らざるを得無い。

近來婦德廢たれ、徒に歐米の女性に則らむとする浮薄の女子教養上大に心すべきものなるを痛感して、義太夫が時局並に皇道上至大の貴重なる物を述べて一層義太夫の發揚すべく自重を要望するものである。（十一月三十日）

訂正

近江清華

前號『二代目鶴澤觀西翁襲名經過に就て』の記事中、三頁上段十九行目に「加ふるに同師は淨瑠璃の三味線の朱入れを、いろは四十八文字にたとへて云々」といふ一節に就き、鶴澤友治郎氏より左の書簡に接しましたので、茲に取消す次第であります。

……前略……　尚右記事中、初代觀西翁が三絃譜章の創案者の樣に御座いますが、同翁は高砂相生松又はいろはたとゑ等々の名作曲者にて、譜章の考案は三代目鶴澤友治郎（初代清七通稱松屋師）の誤文につきお序に御訂正御申込御願ひ申ます。又觀西翁を西と振假名が御座いますが、矢張西の方宜敷やと存じますが、是亦次回よりよろしく御計ひ下さりますやう老婆心より。

音曲昔噺素養（八）

大阪　鐵　老（寄）

今昔耳鳥齋主人の號は浪花音曲研究古考家として其名廣く、舊與銘人の事を辨へ、世上に融通せり。「文政の通人古太瓶藥居」親しく門に入て聞くに「昔噺の滋味理曉を、草紙の端に書きとゞめ、友樂初心者助けにもと」云々とあり、撰擇して敢て一夕の笑樂の具に供し參らせん。

無理當自然の解（續）

亦近くは元祖鐘太夫が語りし二十四孝四段目八重垣の口説のサワリ文造の仕立、此ふしにて能く辨ふべし。貴人下賤の別あると、藝の善惡玆にあるなり。うか〳〵と心の氣づかぬ者は、百年稽古して語るとも其功あるまじ。

近松半二が云ふに、見物が新しうなる故芝居も持てたる物と云ひしは高論なり、去年あたりに元服したる人、二三十年以前生れかはる見物、淨瑠璃は、か樣なるものと心得、無性に譽る故、能きと心得阿呆をつくす、是則ち毒を呑むが如し、あて節斗りに凝りとも、正道に心ざすべし。

寶曆年中に阿彌陀池門前（現大阪西區北堀江和光寺名所の一）新芝居にて、始て人形芝居を十文にて見せかはり、則十七太夫、淀太夫、信濃太夫抔出仕したり、見物もたつた十文切りにて歸る事なれば、太夫も語り退きの樣になりて、さしてもなき口とり、或は堅き詰合の場にても、あて節を入れる樣になりかはり、其節より本家なき故、元も末も行儀惡敷、見物も一日芝居の見物は心靜なり、十文の見物は氣もせはしなく、少しにても慈味な

義太夫笑話共進會

★鐵山に難題を言はれて、お菊が方々尋れた不足の一枚は見つかりましたか。『皿に知れなかつた』（田々舍）

★長松や、お前義太夫を習つて何を修得（あげた）へ。『ハイ九百屋お八を』『馬鹿を言ふな、八百屋お七だらう』『だつて、且那樣は平素掛値を言へとおつしやるから』（磯馴家）

★侍從太郎が預つてゐた義經の妻君は、一體何處の者だらう。『ありゃ京の君さ』（僕朶）

★半七の親は何故縛られた事を宗岸に話さなかつたらう。『だから知らぬ顏の半兵衛だ』（かをる）

★朝顏はどうしても戀路の闇に迷はにやならぬ因緣だ。『なぜでせう』『見初めたのが螢狩だから』（小豊）

★甘輝の城へ直談に出掛け大層威張る人は、ありや眞實にあつた事ですか。『あれ

場は退屈して面白からず、今世は見物も下手、淨瑠璃も下手なりに、偶々能き事を進める人あれば、尤もなれども今時は是が德なりと云つて聞き入れもせず、次第に上手になる道を失ふは當分凌ぎといふべし。

淨瑠璃文章逸事

淨瑠璃を雜藝と思はるゝは、もと作者太夫の得失より出たるなり。昔より作者の博才たる巢林子、また出雲は其名高し。近松門左衛門は元禪僧なり、悟りの中にまた悟りて、淨瑠璃作者となりしは五常の道理を通俗し、惡を除き善を勸むる。是則ち佛心なり、和漢の文に達し歌道に委しく、祇園與市近松を日本の文者と稱せしなり。門左衛門が作文妙なる事は、穗積が作せし難波土產にくわしければ略す。門左衛門に續いて竹田出雲是同しく名作者なり、惣て作文は多くは嘘を誠に作る事と云ふも更なりと雖も、近松が作は、かいて退く程の嘘なれども、人形の貴賤男女の情眞に聞へて、見物の心にひとしく當る。是人情を能く書たる故なり。

國性爺杯は世上の人能く知つて古き噺し杯といふ人多し、數多ある中にも『河内通百人女郎』杯は、古への源氏伊勢物語にも同じかるべし。壽の門松將碁の段、武士、町人、傾城、女房、皆夫れ〳〵の人情見るが如く、奇なり妙なりといふべし。其頃は銘作を上手なる太夫語るゆへ、浪花の名物と成つて、芝居の繁昌かはりふるに物なし、三十年ばかり以前は夜七ツより見物來りて、明六ツに大序を開き五段の淨瑠璃八ツ頃には打出したり。これ全く作者と太夫の智足器量ある故なり。近年淨瑠璃作は、文拙く偶々古事を引に、何に何にある事やら紛らはしき語るとも有つて、一段世界の廣狹も論せず、頭からに仰山なるばかりにて、末に到りて仕舞つかず、時向の傳惡敷序にかはる解も見へず、道行景事を書く文才なければ、多くは道行もなし。

元來淨瑠璃作は神祇、釋教、戀無常、世界の榮枯、人形の苦樂得失、時節の次第、始終文緣の切れざる樣こそ作文なるべし。近年語る阿波の鳴戸といふ淨瑠璃、極て惡しくといふにはあらねども、近松、出雲が作も嘘は違いなけれども、嘘に實の有と、實の無きを嚙しめていふ譬なり。この順禮の娘は大膽不敵の者にて、五十有餘里を唯一人金子を懷にして、海山越え野邊に伏し、辛苦を凌ぎ來るませ者、ちよと口を押へられて死るなり。

（次號へ續く）

は和唐無い事です』（百狂）

★信夫のお袋のおわさは大倉家だと聞えたが本當かい。『さうよ、口を出して十七膳と云ふかられ』（拙朶）

好義不老長生の秘訣

森　三好

一、自ら顧みて年は寄らざる物と思ふ
二、心を若く持てば身體も若やぐ
三、前途を樂しみ明日の事を思ふ煩ふ勿れ
四、過去と云ふ死骸を葬るべし
五、激昂憤怒する事勿れ徒らに精力を損す
六、思慮は密なるを宜しとし食物は淡きを良
七、新鮮なる空氣と理想とを多量吸ふ
八、金錢を目的として競爭場裡に立つ勿れ
九、食物の量を嚴に節制せん
十、娛樂を持て笑つて若やぐべし

猥褻の文句に就て

咲啼女史

淨瑠璃の盛んな明治廿六七年頃から卅八九年迄は、その文章結構、さては神隨等を彼れこれと論らひ、淨瑠璃は其本分を捨てゝ、語るより寧ろ小說と同じく讀み去る處の一種の文學となつた傾きがありましたから、當時學生間にもいたく持て囃され活版飜刻の院本、さわり集の一二冊は必ず机の上に飾り備へられ、寄席（殊に女義）客の六分は書生で持切るの狀況でありました。然し乍ら仔細に觀じ來ると、淨瑠璃を聞くといふより女太夫の容貌を觀んが爲に來るといふ方が蓋し過半を占めてゐました。兎に角、淨瑠璃文句に就て文學研究とは偖も喜ばしい事だと思つてゐたら、案外にも、妖艶なさわり文句にのみヒタと感じ入り、これを其儘實地に行ひ見んとの野心を抱く者なきに非ず、否往々これ有りて、新聞紙の鏡面に顯はれ來るを見て艱はしく思つたものでした。そして、之れ等の俑を作るものは主として女太夫に基因するものが多ふかつたといふものゝ、又淨瑠璃中の猥褻の文句も與かつた故がないでもありません。今妾が思ひ當る記臆を拾つてその猥褻と思ふ文句を玆に揭げますと

辨慶上使『障る下紐解け初る』云々。

『ツイ暗がりの轉び寢に』云々。

鮨屋『二世も三世も堅めの枕二ツ並べてこちや寢ようと先へ轉ろりと轉寢は戀の罠とぞ知られける』

これ等は未だ左程でもありませんが、

本能寺『春長樣も大方に班女の閨のお睦事お局樣の取掛で出船の相伴サアござんせ』云々、

矢口『互ひに抱き月草のうつろい易き色糸の濡れの糸口綻ろび口吸付け引締め付て離れ難なき風情なり』

等は益々甚だしい猥文であります。更に

妹脊山御殿『有無を言はせず御寢所へグット押し込み上から蒲團をかぶせかけ〳〵オウ〳〵宵中內證の御祝言がある筈と暮れぬ中から騷いでじやェゝけなり、こちと迄內太股がぶき〳〵と卯月あたりのはぢけ豆』

城木屋『お前の顏を見るたびに商賣の杉丸太がイヤモほんに朝から晩まで立ち續けぢやわいナア』

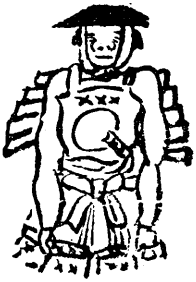
に至ては一層淫猥を極め、最早許すべからざる濫文句ではないでせうか。かゝる風俗壞亂的の猥褻文句を、恥かし氣もなく而も正々堂々然と屑衣を着し、すまし込みて高座に登り語つて恬然として顧みざるものに接しては、心事の程殆ど怪訝の至りに堪えません。且つ

質店『親兄弟も振り捨てゝ殿御に付くが世の敎へ』云々。

忠臣藏七ツ目『勿體ないが父さんは非業といへどお年の上』云々。

などの親不孝文句を麗々しく語るは、愈々以て神聖なる風敎海へ汚濁の毒水を流すものと言てよい。

妾は偏に望みます。これ等淫猥不德の文句は努めて語らぬやう、萬一此文句を改除するに就て一段一節の筋が通らぬとならば、寧ろ淫猥の文句を挿入れた淨瑠璃は斷然一切語らぬ事を。淨瑠璃を嗜しむ事人一倍の妾が何んの爲めに好んで憎まれ口を利きたくはありません、只々、風敎倫道の濫れんことを恐るゝの切なればであります。況や時局の折柄ではありませんか、これでは、淨瑠璃は武士道皷吹の、忠孝仁義のなんのと大きな自慢が出來ないではありませんか。



會報

（投稿歡迎）

▼若手會　二月月番生

二月二十六日に第一回を交正倶樂部に開催しました。なにしろ文字通り若手ばかりの集りですから樂屋の賑かなことは一寸類のなさで、呂聲さんが「來月からは木戸錢を取らう」高尾さんが「さうですともさ」と大賛成。すると光玉さんが乘り出してきて「何處かからお座敷はかゝらぬか」柳光さんがまた「左樣さ、今一つ話があるんだけど給金が折合はぬのでね」すると先刻から默つてゐた都昇さんが「來月からは若手會の代りに若手鞍馬會としよう」等といやもうこゝばかりは春が來てしまつた形。近江清華氏が土曜日なので應援に見えられる。客席は語り連の方々とも多く、嘘拔きの大入滿員。切は「太十」の掛合で全員總出演故誰一人立つ者もない盛況振りでありました。終つていろ〳〵初會を祝して通し物などあつたので、樂屋で酒宴が開かれる清華氏に應援團長になつて下さい等といふ事になり、清華氏曰く「隨分義太夫も聽いたが今夜程永い時間聽いたことはない」といはれる。都太夫さん力彌さんの老人連も若返り、粂造さんや團造さん應援の佳仙さんも嬉しさうであつた。

▼大東京嬉會　森三好

去る二月板橋區中澤家に於て、左の如く開演せり。

鳴門（龜遊、三好）十種香（松子、三郎）日吉（淺路、三郎）揚屋（かなめ、仙君）鮨屋（三好彈語）酒屋（三郎彈語）

なほ三月廿一日は午後二時半より小石川水道町天理教會堂にて開催の豫定。

高級裁縫
秋山洋服店
秋山ゆたか
淀橋區淀橋七二一

義太夫界起原いろ〳〵

★語り物を新聞に掲載するやうになつたのは明治廿一年頃都新聞が初めて掲載し、それから各新聞紙も之に倣つて記載する事になつた

★女太夫が肩衣を着けるやうになつたのは、明治六七年頃上京した竹本京枝に始まる。

★竹筒のマッチを煙草盆に使用し出したのは明治十六年竹本朝太夫が上京し、瀬戸物町の伊勢本で興行した際、餘りの大入にて客に出す火鉢煙草盆に拂底を告げ、竹筒とマッチを代用に出した事から始まる。

★寄席の天井の支柱に鐵棒を用ふるやうになつたのは、これも竹本綱太夫が新柳亭で大入りの爲め、二階の客席落ち毀ちし爲めから始まる。

★語り物の番組を摺り出したのは、明治十九年竹本越路太夫上京、茅場町宮松亭で興行の時、桃色の紙に語り物を印刷し、裏に種々廣告を記載して客に配布したのが抑々の始り。

太棹社彙報

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。
▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。
▽特種の催ほしの外前置きを略します。

——記者——

京城素義聯合協會

京城素義聯合協會は二月廿日午後六時より阿波文樓上に於て總會を開いたが、創立以來初めて大多數の缺席にて大村會長外十六名、會計報告の結果赤字約貳百圓は相談役が割當支出する事に決議し、次いで役員改選に移り、會長は大村、後藤兩氏の意見の相違から一時保留することになり、他の役員のみ左の通り決定したが、從來の制度を一部變更し幹事長を置く事になり、幹事長には田中南北氏が當選した。

幹事長（田中南北）會計兼幹事（末積扇昇）幹事（吉田清秀、竹濃下美雀、福地かすみ）

因に、近く豐澤猿糸、竹本東廣の兩師が渡城する事になつたので、今後の猛稽古が豫想されると共に、昨夏以來淋しき同地の淨界は急轉明朗化す事を期待されてゐる。

熱海に於ける兜會義太夫會

兜會と言つても、顧問の中澤巴氏、副會長の近江清華氏のお二タ方が、今度鶴澤觀西翁を襲名した梅本氏を擁しての清遊である。香伯氏が觀西翁となつての彈初めでもあり、ほんの好き者十人も招待をして「桐の間」でゆる〳〵と淨瑠璃氣分にひたらうといふ初めの豫定が、思ひも寄らぬ大多數の聽衆の爲め俄かに會場を大廣間に變更して、二日間共大盛況を呈した。

初日（十八日）御祝儀（柳鳳）伏見の里（清華、觀西翁）合邦（巴、猿藏）二日目（十九日）太十（松利、友春）講七（清華、觀西翁）陣屋（關路、觀西翁）油屋（巴、猿藏）

東都義太夫名人大會

野澤道之助連は、二月六、七兩日神奈川町田常設館で毎夕六時より左の番組のもとに賑々しく開演。

（初日）上かんや（千登世）日吉九（正鳳）先代（喜鳳）酒屋（操）逆櫓（旭）

寺子屋（巽）忠四（筑波）野崎（清）絃（道之助）（二日目）又助（千登世）太十前（喜鳳）同奥（巽）朝顔（正鳳）沼津（筑波）鮨屋（清）陣屋（旭）壺坂（操）絃（道之助）

綾秀會

三月十三日夕より駒形倶樂部に開催。

日吉（綾路）太十（司光）壺坂（壽光）酒屋（綾登）組打（龍司）安達（壽瓢）絃（竹本綾秀）

第二回　若手會

三月十六日午後五時より文化倶樂部に開催。

寺子屋（呂聲、力彌）新口村（都昇、都太夫）瀧（柳光、粂造）岸姫（高尾、力彌）湊町（光玉、粂造）大切、太十（十次郎、都昇。初菊、高尾。操、柳光。皐月、呂聲。光秀、久吉、光玉。絃、力彌）猿女）壺坂（操、道之助）（二日目）日吉（光月、美之助）壺坂（敬子、雷糸）太十（百塚、播菊）十種香（みなと、良造）沼津（和狂、猿藏）新口（正佳、佳照）陣屋（呂聲、力彌）鮨屋（素遊、良造）堀川（一糸、猿造）合邦（二三樂、良造）中將姫（淺路、佳照）合邦（サ樂、雷糸）佐太村（枝蝶、佳照）沼津（山生、鹿重）新口（丸都、都太夫）引窓（乃菊、佳照）岡崎（いろは、團市）陣屋（美昇、猿之助）忠四（義雀、良造）柳（美峰、猿之助）沓掛（桔梗、猿藏）

附記＝本欄は前書き通り番組通信なきものは記載しない事になつてゐます、素義聯合會があるといふ話は耳にしてゐましたが、番組通信に接せず、幸ひ編輯〆切間際に近江清華氏より番組を貰て此の大會の番組を讀者諸氏へお知らせする事を得ました。後援者並に出演諸氏に對し本誌はかゝる大會の番組は、決定次第成べく早く詳細掲載したいものと思てゐるのです。（記者）

第九回　帝都素義聯合會

帝都素義聯合會は竹内たもつ、猪谷銀水の兩氏が井上泉氏を援助して生れたものであつたが、銀水氏永の休演に加へ、たもつ氏の永眠に一頓挫を危ぶまれた折柄近江清華氏の後援で三月二十二、三の兩日その第九回が賑々しく雷門並木倶樂部に於て開催された。二日間の番組は左の通り。

（初日）本下）みやこ、美之助）太十（都源平）玉三（美登利、廣助）合邦（司、昇、都太夫）安達（松寶、團八）酒屋（紅司、玉勝）戀十（松雨、猿之助）合邦（山生、團吉）三代記（長平、龜造）岡崎（北斗、猿之助）柳（團壽、團龍）松王（美浪、團八）美濃屋（越巴、廣助）安達（三葵、團市）陣屋（錦松、岡三）酒屋（都山、都太夫）野崎（泉、司好）辨慶（司重、團吉）湊町（清華、寛三郎）陣屋（巽

竹本津賀太夫引退興行

前號既載の通り、六世竹本津賀太夫師の引退披露義太夫會は、東都の素義有志を初め、大阪、帝都兩因會後援のもとに東都の男女義總出演にて、三月廿八日午前十一時より歌舞伎座に於て華々しく開演、師は引退披露挨拶の後に、極めづきの『阿古屋』を、三味線鶴澤紋左衛門、三曲豊澤芳太郎、ツレ鶴澤紋三郎で語つたが、此語り物は上品なる師の個性を發揮するに最も適してゐるものであり、此外掛合の『河庄』の持役孫右衛門も又聽きものであつた。前號記載の番組中第七「壽式三番叟」の役割が變更されたので第七のみ改めて左に再錄する。

第七【壽式三番叟】千歳（東太夫）翁（都太夫）三番叟（朝見太夫、駒登太夫、殿母太夫）絃（猿之助、猿藏、芳太郎、猿喜知、猿三郎、扇之助、松四郎、美之助、蟻鳳）

二世 鶴澤觀西翁襲名披露會

梅本香伯氏の鶴澤觀西翁襲名披露義太夫大會は五月廿三日に延期、仁壽講堂に於て華々しく開催される事に確定した。東都素義界は言ふまでもなく、遠く關西よりも應援出演者多數ある見込みにて、氏は御祝儀として初代觀西翁作曲の『相生高砂松』を初席に演じ、大切には『本下』の掛合を上演し、その役割は本藏（湊太夫）若狹之助（都太夫）伴左衛門（殿母太夫）三千歳姫（朝見太夫）絃（猿之助、琴芳太郎）の由である。

第十五回 素女會の公演

竹本素女師の主宰する素女會は、忠孝義烈の義太夫精神を宣揚し、銑後の義太夫報國といふ趣旨のもとに、花に先立ち三月廿一、廿二、廿三の三日間毎夕五時半より仁壽講堂に於て賑々しくその第十五回を公演した。東都女義總動員といふべく番組は左の通り。

（廿一日）日吉丸（津賀重、素子）白石（巴龍、駒照）辨慶（團雀、清二）沼津（和佐之助、駒清）聚樂町（鶴松、仙玉）忠九（重子、勝之助）鳴門（東朝、三平）太十（染登、巴佳）朝顔（素八、素衛門）先代（素女）

（廿二日）三代記（巴松、素好）鈴ヶ森（佳世子、駒照）本下（佳仙、仙君）合邦（昇登、巴佳）酒屋（駒龍、津賀昇）十種香（越駒、三生）柳（素廣、猿昇）湊町（佳照、清一）儀作（小和光、清三）壺坂（素女）

（廿三日）八陣（素國、素花）玉三（彌福、駒一）忠六（素次、素衛門）鮨屋（猿春、猿女）鰻谷（彌周、三生）蝶八（播磨一、仙玉）紙屋（小津賀、紋敎）陣屋（素昇、猿玉）野崎（播磨年、駒登久）寺

子屋（素女）

なほ大切には毎夜舞踊花柳泰補指導「上海だより」「銃後便り」「愛國行進曲」を總掛合にて上演した。

更新の新義座

青葉の五月東京公演

豊竹つばめ太夫去りし後の新義座は、新らたに竹本陸路、同隅榮の兩太夫を迎え、新陣容を整へ益々研磨、初志を貫徹すべく斯道刷新に向て邁進し、前にも增さる好評裡に各地を巡業してゐるが、五月廿五、六、七の三日間東京公演が決定された。會場は仁壽講堂で、東京公演に際しては大阪の淨界一方の重鎭竹本叶太夫、竹本角太夫の兩師が助演する筈であつたが、日時變更の爲め兩氏の出演は都合惡しく、今回は新陣容の若手一黨に桐竹門造師指導の文樂乙女人形を遣つてお目見得をする事になつた。なほ同座は四月一、二の兩日大阪北陽演舞場に開演。

一月第一回を開演し、先づ東都男義の意氣を示したこの一座は、其後引續き三日間づゝ毎月上野鈴本の畫席を道場として開演し、血の出るやうな精進に、漸く聽衆も動きはじめて、二月は八、九、十日の三日間正午より次第に尻つぱねの豫想以上の好成績で打上げたが、一同今後の精進努力をもつて三月十四、十五、十六日の三日間第三回を開演、大入りの喜びを分つて目出度千秋樂の幕を閉ぢた。三日間の語り物は左の通りである。

柳、御殿、寺子屋（巖春太夫、扇七）陣屋、紙治、壺坂（里太夫、美之助）殿中、土橋、忠四（さくら太夫、粂造）揚屋、十種香、辨慶（都太夫、龜造）太十新口、山名屋（巖太夫、新造）酒屋、赤垣、志渡寺（津賀太夫、紋左衞門）

好調の男義

鈴本の畫席

竹本都太夫

獨演會の盛況

この處一生懸命に精進してゐる都太夫師が、文之助改め龜造の絃で二段語りの會を催した。三月八、九、十の三日間折柄恰度寒さがぶりかへした時だつたが、連日滿員の盛況で、素義の有名な方々の後援あり、近頃堂々たる會であつた。語物は左記の通り。

千兩幟、三代記、白石（津賀重、駒照）日吉丸、宿屋、玉三（駒一、駒清）先代安達三、廿四孝（駒龍、津賀昇）梅由、鈴ヶ森、紙治（都太夫、龜造）太十、沓掛村、白木屋（彌國太夫、寛三郎）新口村、日蓮記、柳（都太夫、龜造）

竹本大隅太夫と

鶴澤寛治郎

鶴澤寛治郎師は一昨年の冬、梅本香伯氏の斡旋にて竹本大隅太夫師と盃を交は

し、爾來大隅太夫の好女房役として今日迄その三味線を勤めて來たが、今度何かの都合上、寛治郎師は同太夫より離るゝ事を決意した由である。

女子 義太夫勉强會

藝道研磨に精進する事屈指の一人、竹本佳照師の主宰する處の女子義太夫勉强會は、その第八回を三月十八日午後五時半より雷門東橋亭に開催したが、例に依り盛況を極めた。

舟別（佳世子）鳴門順禮歌（佳晴、豊菊）同十郎兵衛内（佳仙、仙君）太十（昇登、巴佳）紙屋（播磨年、駒登久）先代（若好、清二）新口村（佳照、清一）大切（組打）熊谷（佳仙）敦盛（佳世子）絃（佳照）

竹澤龍造一座

竹澤龍造一座が本社と提携、東都素義有志諸賢の後援の下に淺草松屋ホールの名物とまで賣り出したのも既に四五年前の事であるが、先師龍造亡き後は妻女の龍光師が一座を盛り立て、補佐として竹澤龜次郎君が東奔西走努力の結果益々堅實に、今は東京組とも一丸となつて三十有餘名の大一座の隆盛を見るに至つた。一座は東北、北海道に多くの後援者を有し今日迄殆ど同地方を舞臺として活躍を續け、昨春は滿洲京城等を巡業して好評を博し、歸途は四國九州方面にも後援者を得てこれ又頗る好績を收めたが、今回四年振りに歸京、數日休養の上江尻の歌舞伎座を振出しに東海道を巡業する事になつた。なほ一座の幹部連名は左の通りである。

竹澤龍壽美、同龍佐久、龍春、龍榮、龍多景、龍幸、龍美和、龍登代、龍加代、龍奈尾、龍照、龍君、龍多摩、龍信、龍多津、龍きん、龍歌女、龍千代。龍富美、龍佐登、龍富士、龍喜代。龍巴津、龍奈美、龍花。竹澤龍造。（囃し連、福壽、保、小動具、錦哉、照明、浩一、茂）主幹竹澤龜次郎。

義太夫世話方 睦組合

十三年一月改正氏名

會長（玉次郎、脇田玉次郎）幹事（小米、宮坂幸太郎）會計（小清、石田清太郎）相談役（千島、飯田初太郎）庶務（謙治郎、中居謙治郎）會員（八壽、野村八壽、小初、小森初太郎、清昇、南澤織作秋孝、田邊周作、彌島、丸橋七郎、三昇竹内正、景春、武者景治、龍糸、黑井秀雄、梅吉、石井喜太郎、利夫、榊原利夫五十丸、磯野五十丸）

大阪 文樂座（三月興行）

三月四日より十三日迄（新町演舞場）繪本太功記＝尼ケ崎中（富太夫、鶴太夫）（辰太夫、友駒）（千駒太夫、寛若）前（呂琴、友駒）太夫、叶）後（文字太夫、廣助）艶容女舞衣＝酒屋切（駒太夫、清二郎、友駒）

菅原傳授手習鑑＝寺子屋中（長尾太夫）（寛市、八造）切（津太夫、綱造）妹脊山女庭訓＝背山（大判事、相生太夫道八）（久我之助、源太夫）（吉左、喜代之助）妹山（定高、つばめ太夫、團二郎琴、喜代之助）雛鳥（伊達太夫）腰元（さの太夫）（重造、友衛門）伊達娘戀緋鹿の子＝火の見櫓（播路太夫）（常子太夫、宮太夫）（駒若太夫、相瀬太夫）（津磨太夫）（重造、友衛門）（吉左、喜代之助）（吉季）（清友）（團二郎）

同十六日より廿五日迄（北陽演舞場）良辨杉由來＝志賀の里（源太夫、八造、ツレ、清友、重次郎、八雲、友三郎、吉藏）櫻の宮（呂太夫、播路太夫、常子太夫）（津磨太夫、隅若太夫）（富太夫、長尾太夫）（友衛門、寛市、叶二郎、寛若）（吉季、一郎右衛門）東大寺（千駒太夫、友駒）（竹太夫、團伊三）二月堂（良辨、つばめ太夫）渚の方（相生太夫）伴僧（辰太夫）（團二郎）

釣女＝太郎冠者（相生太夫）大名（つばめ太夫）美女（源太夫）醜女（伊達太夫）（道八、吉左、喜代之助、友太郎、友三郎吉藏）伊賀越道中双六＝沼津里切（大隅太夫、寛治郎、ツレ友造、友平、胡弓清友）本朝廿四孝＝十種香より狐火迄＝十種香（呂太夫、叶）（伊達太夫、重造）狐火（呂太夫、叶、ツレ吉季、琴、友駒）（伊達太夫、重造、ツレ一郎右衛門、琴、重次郎）

襲名取消

前號の本欄にて豊竹古靱太夫は綱太夫、同つばめ太夫は古靱太夫襲名の報道は誤聞につき取消します。

なほ豊竹つばめ太夫は竹本織太夫、竹澤團二郎は竹澤團六を襲名、五月興行でその披露をします。

二代鶴澤寛治郎 三回忌法要

二代鶴澤寛治郎師は平素虚飾を厭ひ、永眠の間際まで石碑等の建立を堅く戒めたものであるが、師逝いて早くも茲に三年、一門の人々は敬慕の念止み難く、又一つは修業の勵みにもと、今回その墓碑を鶴澤寛治家累代の墓碑境内に建立し、石碑供養を兼ね四月四日午後一時より二時迄阿部野墓地鶴澤寛治家墓碑内に於て左記の人々發企のもとに三回忌法要を營み、併せて斯界先祖代々の諸靈旋我鬼を行ふ事になつた。なほ當日は今回觀西翁を襲名した梅本香伯氏も下阪參列さるゝ由である。

（發企人）

三代　鶴澤寛治郎
六代　野澤勝平　鶴澤伊八　鶴澤寛市　鶴澤寛若
四代　竹本南部太夫
二代　竹本越名太夫　寛八　寛童　寛之助　寛吉　寛太郎

本誌後援名譽會員（イロハ順）

（東京之部）

高島一廣氏
廣瀬いろは氏
岡崎円六氏
吉川浪補氏
平野ろ昇氏
阿部一氏
中澤巴氏
竹内とをる氏
安藤どくろ氏
吉田登盛氏
小川都山氏
安藤都昇氏

保々長平氏
栗原千鶴氏
神馬里芳氏
本木大熊氏
奥村沖氏
鈴木和樂氏
小林和舟氏
本多可笑氏
大和田可笑氏
飛石かなめ氏
加藤兜氏
高橋可遊氏
西田可松氏

松尾武市氏
大用大嘉津氏
田口辰壽氏
疋田大龍氏
井上巽氏
小林太二八氏
根本團壽氏
坂倉素遊氏
浮谷祖樂氏
宮本武藏氏
萩原うつぼ氏
乃村乃菊氏
高野昇氏
中野吳羽氏
石川華笑氏

清水彌生氏
國井丸都氏
松林福笑氏
鈴木兒雀氏
水戸部壽氏
原田越巴氏
河野國聲氏
松岡語松氏
松田光風氏
寶藏寺天昇氏
大築葵氏
松本朝章氏
及川旭氏
柳有明氏
寺岡三幸氏

木村さかえ氏
齋藤山生氏
平井榮氏
細川清氏
金田金鳳氏
井田菊泉氏
錦錦松氏
淺田奇聲氏
歸山歸世花氏
川奈部銀司氏
猪谷銀水氏
岩木義雀氏
岩田末成氏
高瀨操氏
吉田美地旬氏

横井三由氏
野口みなと氏
岡田源氏
北村三葵氏
池田三國氏
吉田三芳氏
鈴木松實氏
玉井松樂氏
菊池秋月氏
平井壽樂氏
山田壽瓢氏
秀秀峯氏
田口司重氏
濱口秋華氏
武笠宏亮氏

高品一重氏
桑原美峰氏
松岡茂里雄氏
白井清華氏
近江清華氏
湯原清司氏
沼井盛鶴氏
（地方之部）
米國平野一昇氏
同武榮玉氏
同杉山陶岳氏
同兼廣廣玉氏
同西本西紫氏
樺太宮下杉鳳氏
横濱田島集樂氏

大垣吉岡十八公氏

名譽會員

小林太二八氏
齋藤山生氏
池田三國氏

本誌後援名譽會員を御快諾賜り難有奉深謝候

太棹社

各席語り物帖より

三月分（十九日迄）

大會又は番組御送付のもの、或は新らたに生れた會は彙報に記載致しますが、本欄は讀者諸賢の催しをなるべく公平に廣く報道する趣旨で、編輯締切の前日各倶樂部を一巡して集めたものでありまし。但し見落しは御用捨を願ひます。

——記者——

交正倶樂部

（五日）野崎（美鳳）戀十（松雨）十種香（美尚）鮨屋（清華）湊町（鏡鳳）安達（北斗）絃（猿玉、美之助）

（七日）鳴門（駒蝶）合邦（井孝）太十（里芳）沼津（蝶花）絃（勝助、亀造）

（九日）先代（小菊）辨慶（鏡花）八陣（龍水）酒屋（鈴中）安達（登盛）新口（芳生）絃（粂造）

（十日）山名屋（勢州）安達（里芳）梅由（登盛）本下（清芳）宿屋（千壹）絃（芳太郎、勝助、粂造）

（十二日）酒屋（北斗）太十（綾幸）先代（小竹）百度平（二樂）絃（清吉）

（十四日）沼津（太二八）酒屋（橋）鮨屋（更雨）油屋（兒雀）絃（辰六）

（十五日）陣屋（太二八）忠九（なほ子）山名屋（いそ子）忠六（春枝）鰻谷（清子）絃（辰六）

（十六日）先代（清月）沼津（梓）辨慶（錦志）太十（巽）吃又（和舟）絃（松榮）

（十七日）鳴門（住龍）安達（壽）鮨屋（米賀）柳（團壽）松王（吾樂）沼津（浪花）絃（團龍）

（十八日）本下（鬼樂）蝶八（竹峰）野崎（鈴仲）寺子屋（榮生）先代（登盛）十種香（芳生）柳（綾登）絃（才廣）

菊川倶樂部

（四日）寺子屋（和狂）沼津（美尚）太十（義昇）絃（猿藏、扇之助、美之助）

（九日）忠六（欣聲）忠三（福壽）十種香（藤仲）森（福枝）安達（上誠）絃（團龍）

（十九日）又助（茂玉）宿屋（加光）野崎（佳昇）堀川（歸世花）絃（扇之助、美之助）

文化倶樂部

（四日）十種香（都昇）新口（丸都）陣屋（巽）山名屋（都川）酒屋（都山）壺坂（北壽）絃（都太夫、絃平、清二）

（五日）本下（有明）柳（菊水）新口（三芳）＝（榮樂）紙治（松玉）鮨屋（糸子）絃（粂造、糸子）

（七日）松王（上誠）柳（團壽）本下（西川）河庄（三蝶）辨慶（豊）絃（小津賀、團龍、清松）

（十一日）柳（司重）先代（九段）陣屋（清昇）堀川（山生）絃（團吉、團市、紋三郎）

（十三日）城木屋（かなめ）野崎（東松）柳（宮古）日吉（專好）揚屋（技蝶）本下（文鏡）太十（掛合）絃（仙君、三郎）

（十四日）辨慶（柳蝶）太十（喜鶴）柳（百塚）沼津（圓可）十種香（壽）酒屋（勝樂）安達（柳汀）絃（鶴玉、播菊）

（十八日）寺子屋（時昇）鳴門（吉香）蝶八（大和）寺子屋（吉豊）新口（茂里雄）日蓮記（都）安達（秀峰）絃（清助、清照）

淀橋倶樂部

（十四日）松王邸（清華、寛三郎）其他初音、千里氏等。

（十九日）酒屋（清昇）沼津（和勇）新口（政子）戀十（菊丸）紘（巴太夫）

駒形倶樂部

（十二日）柳（都）忠六（榮樂）八陣（有明）太十（榮龍）松王（湖月）壺坂（米司）紘（新兆）

（十六日）森（綾路）阿漕（壽瓢）柳（喜聲）辨慶（龍司）鳴門（綾登）酒屋（美好）紘（綾秀、素女若）

入谷倶樂部

（七日）酒屋（秀玉）玉三（照子）組打（有明）紙治（松玉）壺坂（文司）紘（彌國太夫）（九日）八陣（輝子）先代（光玉）十種香（松雨）柳（晋水）沼津（集樂）安達（美津豆）鳴門（和子）合邦（秀鶴）紘（和孝、小和孝）（十一日）新口（美芳）太十（要）紙治（花蝶）安達（仙玉）野崎（紅司）紘（玉勝、玉孃）

（十三日）赤垣（笑樂）太十（巽）十種香（玉寶）陣屋（松藤）壺坂（高峰）安達（小六）紘（松造、松四郎）

小石川倶樂部

（一日）三代記（素風）寺子屋（三玉）城木屋（かなめ）玉三（美登利）河庄（越巴）陣屋（錦松）野崎（いさを）紘（廣助、廣一）（七日）日吉（井駒）湊町（專好）先代（越松）同奥（かなめ）辨慶（井駒）紘（播磨年、仙君）

（十一日）太十（周樂）壺坂（昇朝）柳（壽樂）忠六（井孝）鳴門（一竹）紘（朝見太夫昌子）

湯原清司氏經營の日新製作所新築落成

湯原清司氏經營の日新製作所は、襄に販路擴張の爲め株式會社とし、先以て工場の增築を急ぎ、次いで納期及び製作の敏速を計るべく本社内に營業所新築中の處、今回工場を始め同營業所の俊成を見るに至つたので、從來の京二ビル内假營業所を大井北濱川の本社へ、本月中に引移す事になつた。

當座帳

……素……

▽細川清氏　病氣療養中

……玄……

▼蝶花樓馬樂　下谷區北稻荷町三三番地へ轉居、電話根岸〇七四六番呼出。

▼竹本陸路太夫　新義座へ加入。

▼竹本隅榮太夫　同上。

▼豐竹つばめ太夫　文樂座に復歸、竹本織太夫を襲名し、五月興行に披露。

▼竹澤團二郎　文樂座へ復歸、同竹澤團六を襲名、五月同上。

▼豐澤猿糸　近日京城へ。

▼竹本東廣　同上。

▼竹本都太夫　野澤桑造と共に三月十六日、常陸太田町婦人會の招きにて銃後慰問會へ出演、先代、寺子屋を語る。

▼鶴澤司好　病氣療養中。

▼豐竹湊太夫　病氣の爲め津賀太夫引退興行を休演。

▼竹本叶太夫　五月廿日過滿洲へ。同上。

▼竹本角太夫

編輯後記

★すつかり春めきました。本月に入て、素義の方では聯合會の春季大會を始め、各師連中の催し連夜各席滿員、玄人側では素女會の公演、鈴本の晝席、都太夫師の獨演會、佳照さんの勉强會、さては大殿堂歌舞伎に於ける津賀太夫師の華やかな引退披露大會と、間斷なきまで盛んに開演され、誠に賑々しきことであります

★永々の病中、あの會この會いづれも疎遠に打過ぎ失禮致してゐます。御見舞狀を賜りました方々に厚く御禮申上ます。

★病氣は氣で病むと言ふから病まなければよい、持病は病を持つと云ふから病を捨てればよいなど申しますが、そんなわけでは無く、矢張一昨年の大病後凡ての對抗力が弱つてゐますので、もう少し無理をしてはいけないと醫師から注意をされ、まだ此の世に少々未練がありますので大事にしてゐます。

★偖て前號に載せましたところの觀西翁襲名に就ての美談佳話集に就ては、あまり面白くない人もあるさうですが、最近の若太夫問題に就ては、正論を以て呼びかけたいと思つてゐました事で、本誌は今後とも義太夫界の不正不義を正し、正しき淨曲精神を發揚し、斯界に於ける指導機關たることを自信して邁進するものであります。

——芳河士記——

第九拾四號　（毎月一回廿五日發行）

定價
一部　金三十錢　郵稅三錢
六月分　金一圓八十錢　郵稅共
一年分　金三圓　郵稅共

廣告料
普通　一頁　金貳拾圓
特別　一頁　金參拾圓

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます
▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なる可く振替に御送金の事
▼郵券代用は一割增但三錢切手の事

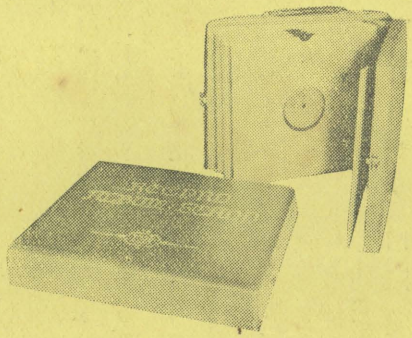
昭和十三年三月廿二日印刷納本
昭和十三年三月廿五日發行
東京市小石川區音羽二丁目一四
編輯兼發行人　富取壽鹿
東京市牛込區早稻田町五八
印刷人　栗原榮松
東京市牛込區早稻田町五八
印刷所　栗原印刷所
電話牛込一四五一番
東京市小石川區音羽二丁目一四
發行所　太棹社
振替東京三一七八五番

皆様の理想にピッタリたし獨特品

新考案

レコード スタンド ケース

今までにない
素晴らしい
アルバムケース
です
レコード音樂
愛好家の皆様に
是 非!!



特長

1 超モダーンの体裁
2 アルバム式(十二枚入)
3 携帶便利
4 堅牢至極
5 價格低廉

宣傳中特價 ¥3.00(十吋) ¥4.20(十二吋)

發賣以來非常な好評を戴いてをります。
三越本店及一流樂器店にて販賣致して居ります。

美術ケース
荷造箱
蒲鉾板
家具一式

東京市深川區清澄町二丁目十一
錦ケース製作所
考案者 錦學四郎
電話本所(73)二七六四番

昭和十三年三月廿二日印刷納本
昭和十三年三月廿五日發行（毎月一回廿五日發行）

著者裝幀

新刊

田廬俳句子規時代集

頒價金壹圓五拾錢
送料金拾錢
第一版品切
第二版品薄

本書は著者が曩きに昭和六年四月十日先考三十三回忌に田廬俳句子規時代集を上梓供養したと同樣、本年五月十一日先妣五十回忌に際し紀念出版するもの、卷頭著者の言葉に「……第一句集は正岡子規先生在世中私淑してゐた私の姿であり、第二句集は子規先生終焉後明治俳句の混沌として依據すべき處なき――一種の俳界戰亂――時代を冷觀して私は私の進むべき道を拓かんとする簑笠犁鋤の面影であると言つてよい……」とあり、添ふるに大正三年日本最初の俳畫展覽會へ出品したる著者の處女作を口繪とする等、近時豪華を誇る此種出版物が所謂大家の序跋讃頌題詩句を賣物とせる中に、巍然として詐らざる自己を表現せる處著者の面目躍々たるものがある。

發行所　西宮市川添町十一番地　關西藝術新聞社　振替口座大阪七〇二九六番

發賣所　東京市丸ノ内三菱二十一號館　俳書堂　振替口座東京二七一〇九番　電話丸ノ内(23)四八〇〇番

太棹（第九拾四號）　定價金參拾錢